

高倉学寮草創考

序

- 一 草創記の原型と通説化の経緯
- 二 草創記の典拠と検証
- 1 寛文中・寛文五年創立 説
- 2 観世音寺学寮移籍 説
- 3 涉成園・東坊・御長屋講堂 説
- 4 高木宗賢献財 説
- 三 通説への批判と修正
- 結び

序

嘱託研究員 深田 虎雄

わが大谷大学の前身「御学寮」が、名実ともに学寮と名のるにふさわしい機構を整備したのは、以後高倉学寮と通称される新学舎を高倉通り魚棚の地に新築移転した宝暦五年（一七五五）に遡る。この時、新しく制定した諸条規・所化心得等を収録した『学寮諸制条』¹が、学寮人によって書かれた学寮記録の最初であり、その後は『講師寮日記』『上首寮日記』、『知事所日記』『講者名実録』『年々講簿』その他の学寮記録が作られ、それらによって相当克明に学寮の様態や沿革を知ることができる。しかし高倉以前の史料には学寮独自のものはなく、公的な行政記録である『上檀間日記』や『粟津日記』などから僅かな関係記事を拾い集めたり、末寺の寺伝、私録

に頼る外はなく、その姿は深い霧の中に包まれている。

しかるにわが大学では学寮草創について一つの通説を作りあげている。大学刊行の諸出版物の草創記はすべてこの通説に拠っているが、代表的な例として昭和十三年刊行 大谷大学編『真宗教学史概説』³がある。これは大谷大学予科第一学年用仏典基礎学の教科書として編集、執筆は稲葉秀賢教授である。それには、

—寛文年間筑前太宰府観世音寺の学寮を枳殻邸内の西北に移し一派教育の機関とした—

と述べている。すなわち1 時は寛文年間 2 縁起は観世音寺学寮移籍 3 場所は枳殻邸（涉成園） この三点セットが草創通説となっているのである。

われわれ学事研究室では、この通説が何に依拠して作られたものか自分の眼で確かめることを共同テーマとし、折に触れて資料の収集・関係寺院の調査等を始め既に五年を経過した。そのつど調査報告や研究発表を行なってきたが、この小論は私なりの総まとめとしての試論である。

一 草創記の原型と通説化の経緯

学寮草創を、寛文年間・観世音寺・枳殻邸（涉成園）の三点セットに拠って述べている文書・論文は多いが、それらを並べてみるとその原型は恐らく明治二十年前後に作られたと思われる本山報告掛編集『真宗大学寮沿革略誌』⁶から発することがわかる。これは一つのまとまった形で編集した最初の学寮沿革史であるが、つい近ごろようやくその素性がわかった。本山の機関紙『本山報告』によれば、明治三二年（一八八九）文部省より教育史編纂資料として高倉学寮沿革史の提出を要請され、真宗大学寮で嗣講細川千巖以下四名を取調掛として急遽その編集に着手、『沿革略誌』はその文部省への報告書であることが判明したのである。⁷『沿革略誌』は学寮の草創をつぎのように記している。

沿革

本寮ノ創立ハ寛文年中ニ在リト雖モ其年時ヲ詳ニセス、然ルニ當時ノ制度ハ漫リニ学舎ヲ建ルヲ許サレス、而シテ一派ニ於テハ僧養ノ必要ヲ感セシヲ以テ末徒筑前國安樂寺一保等ノ議ヲ納レ筑前国観世音寺ノ学寮ノ名ヲ移シ、本寺別邸涉成園ノ一部ヲ以テ之

二 充テタリ

ここに始めて寛文年間・観世音寺・涉成園の三点セットによる草創記が創作されたのである。細川千巖にしてみれば、史料を十分に検証する余裕もなく蒼惶のうちに草したので、或いはとりあえずの試論のつもりであったかも知れない。しかし権威ある本山・真宗大寺院の名において初めて公表された草創記であるから、その後そのまま鵜呑みにされ踏襲されて行く。

大正十三年（一九二四）に至って橋川正教授は「寛文年間」を「寛文五年」と修正し、翌十四年、佐々木月樵学長は「大合大学樹立の精神」の冒頭橋川教授説をそのまま述べておられる。⁹ 寛文五年（一六六五）を創立とすると昭和四〇年（一九六五）が創立三〇〇年にあたり、柏原祐泉助教授の「大合大学三百年のあゆみ」¹⁰と細川行信助教授の「略年表」を主な内容とするさ、やかな記念誌が作られ、これが本学の定説として今日―平成元年・創立三二四周年に至っているのである。

二 草創記の典拠と検証

そこで先ず細川千巖嗣講以下四名の取調掛が編集した『沿革略誌』の典拠となった文献を尋ね、併わせて所見を述べてみたい。

真宗総合研究所紀要 第七号

1 寛文年中・寛文五年創立 説

「寛文年中」の文字の所在を尋ねると、宝暦五年（一七五五）の『御壁書』と同年の『惠然建議書』の中に記されているだけであって、それ以外にはなくこれを裏付ける資料もない。

いつの頃からか学寮講堂の壁に講筵規則三ヶ条が貼り出されてあり、所化はこれを「御壁書」と称していたが、いつ誰によって作られたものかすっかり忘れられており、ただ「寛文年中」御下賜とだけ伝承されてきたもののようである。

寛文年中御壁書之寫

一、位階之高下、官職之勝劣を論せず、着帳次第列席可有之事

一、着座退出之時、威儀亂動有之間敷事

一、講筵におゐて戲笑雑話停止之事

右寛文年中被

仰出候制條堅可相守者也

宝暦五年乙亥四月

下間治部卿
下間大藏卿
栗津 大学
飼田 大膳

右者御学寮講堂ニ懸置候制條¹¹

第二条は行儀よくせよ、第三条は静かにせよ、との所化心得で小学校の教室の壁にでもふさわしいようなものであるが、第一条は、この講堂では身分や寺格は通用させぬ、階層秩序は着帳年時の先後¹²すなわち学歴の先輩後輩の序列だけであるとの宣言であって、これは法主においてのみ発し得ることばであると考えられるところから「御壁書」として重視されてきた。宝暦五年、老朽化した旧学寮校舎を去り高倉通り六条御屋敷の地に講堂・所化寮を新築移転した時、講師恵然は新講堂に貼る新壁書を「寛文中被 仰出候制条」の後書きを加えて書くよう上檀家老に委嘱したものとされる。更に恵然はこれを機に学寮職制の確立を図り『恵然建議書』を上申するが、その冒頭、

当山ノ学林ハ寛文中ノ御創建ニシテ数年ヲ経歴スー
と記した。¹³ 彼は「御壁書」が下賜された時を以て、従前私的な集まりに過ぎなかった教学研究集会を東本願寺本山がその公式教育機関として公認した日、すなわち学寮創建としたのである。恵然の学寮にかけた意気¹⁴ごみの程がうかがわれる。

三点セットのうちこの年代だけは高倉以前から学寮内での通説として長く伝承されて来たものと信じたいが、或いは創立を寛文まで溯らせたいとの、例えば恵然のような執念の人による故意の作為かも知れないと疑われても、裏付け資料がない限り致し方ない。しか

し少なくとも高倉以来二四〇年の間伝持されつづけ学寮人すべての通念となってきた寛文年間創建説であり、その典拠となる御壁書（『学寮諸制条』）・恵然建議書は大学寮所蔵書であったから、『沿革略誌』の編集者にとって「寛文中創建」は決定的であったと思われる。

その後現われる「寛文五年」の文字は、能登鶴飼往還寺所蔵の伝恵琳講師真蹟「学寮之由来」と呼ばれる文書の中に記されているだけであり、これ以外にはなくまたこれを裏付ける資料もない。

恵琳筆「学寮之由来」¹⁴ 往還寺蔵

吾宗学問をむねとせざるゆへにや、往昔ハ両本廟ともに学肆を置くことなし、寛文五年乙巳浪華の御門徒高木宗賢資財を献して学寮を創建す

樹心師もと能州の妙嚴寺の地中往還寺に誕生して武府に遊学す、泥洹院尊和尚 これに講主を命し、禅宗の清規を模して別に準則をたつ、眷遇ことに渥くして、七條五條の袈裟各一領・念珠一具并尊書を賜ふ、後に泉州の南溟寺に移りて天和三年癸亥五月十一日永逝す、法海院と號す

年代悠邈にして載籍闕如いたし、その伝聞なるのみ

この書は—寛文五年乙巳浪華の御門徒高木宗賢資財を献して学寮を創建す—と学寮創建の由来と、往還寺出自の法海院樹心の学寮への功績をごく簡単に記したものである。

明治二二年の『沿革略誌』以来「寛文年中創立」がその後三十余年通説として使われてきたが、大正十三年橋川正教授が「寛文五年」と具体化され、以後寛文五年説が用いられる。¹⁵ 橋川教授はその典拠を示していないが、恵琳文書を披見しこれに拠って公表されたものであるう。この書以外に「寛文五年」の文字はどこにもないからである。

この文書の成立を推量すると、往還寺には—樹心の献策により延宝六年（一六七八）御長屋講堂を創建、樹心が初代講師に任じられた—との由緒書があり、併わせて当時の法主の親簡数通を所蔵している、折しも講師恵琳が北陸巡化の旅に当地へ立ち寄ったので、住職はこれらの文書を示し樹心が学寮開基であることのお墨つきを一筆願い出たのであろう。しかし恵琳は師恵然の遺した「寛文年中」に執し「延宝六年樹心創建」を認めるわけにはいかぬ、そこで学寮創建については樹心説を退け、一方その功績は法主手簡により疑うべくもないのでこれを顕揚する、そうした苦心の作文であって最後に—年代悠邈にして載籍闕如いたしその伝聞なるのみ—と結んだ。多分往還寺住職には不本意なお墨つきであったと思われる。

なぜに恵琳が「寛文五年」と具体的な年時を記したのか。彼は恵然講師時代には次（嗣）講職にあり恵然に密着して高倉学寮づくりに至瘁した学匠である。もし宝暦五年時に寛文五年説が何程かの根拠を持って伝承されてきたものであれば両師は漠然と「寛文年中」とは言わず、「寛文五年」と記した筈である。樹心由緒の「延宝六年」に対応して「寛文五年」と具体化したのもあろうか。恵琳のその場の筆の走りという外に推測のしようがない。要はひとえに恵琳の書の信にかかっているわけであるが、師自身「年代悠邈……その伝聞なるのみ」と責任を避けているのだから何とも心もとなない年記ではある。橋川教授がなぜにこれを探り上げられたのか今は何う由もないが、これあるによつて創立三〇〇周年も成り立ったのである。

学寮創立寛文年中説に対する異説は、『往還寺寺伝』延宝六年（一六七八）樹心説と、『豊絵詩史』正徳五年（一七一五）恵空・通元説の両説があるが、それについては次節以下で述べることにする。

2 観世音寺学寮移籍説

次に『沿革略誌』三点セットの第二、—末徒筑前（肥前）国安楽寺一保等ノ議ヲ納レ筑前国観世音寺ノ学寮ノ名ヲ移シ—の草創縁起は何に拠ったものであろうか。

この『沿革略誌』を編集するにあたり、急遽資料の収集作業が始められたが、その草創期分の史料ノートが『本山上檀古記録拔萃』である。¹⁷この中に「慶応二寅年 諸申物日記 拔萃」¹⁸と題する肥前国唐津安楽寺の由緒書の抄録が筆写されており、併わせてその弟寺である美濃国久徳村廓然寺の由緒が「明治十二年 寺院明細帳 拔萃」¹⁹として追録されている。

肥前国安楽寺由緒書に記された学寮とのかかわりはあらまし次のようなものである。

「安楽寺第四世玄保の第一保が琢如法主の時京に上り南禅寺で勤学していたが、日蓮宗の徒が御寺内で真宗批判の難問を放ち憚る所がなかった、そこへ一保が駈けつけこれを降伏した、法主は大へん感賞され数々の褒美を賜わった、その節玄保・一保兄弟が筑後（筑前）国大宰府観世音寺にあつた講を移して学寮を創建されるよう献言しお取り持ちをした、これが高倉講堂御起立の縁起である――」

この草創縁起説は安楽寺由緒だけで他には無いから『沿革略誌』がこれによって書かれたことは明らかである。――一保はこの功により大悟山廓然寺の寺号を賜わり美濃に一寺を建立しその開基となつた――とあるところから寺院明細帳により廓然寺を調べ、そこで一保についての確証を得たようである。それには、

「開基玄昌（一保改名）萬治二年琢如法主ノ時、南禅寺ヨリ本宗

エ對シ法門諍論ノ端ヲ開キシニ、右玄昌問答往復シ遂ニ勝利ヲ得タリ、其褒賞トシテ法主ヨリ七條・五條・念珠等ヲ授與シ廓然寺ト命セラル、後帰依ニヨリテ當地ニ一字ヲ創立ス――」

と記されている。廓然寺の系図は愛知県岡崎市の垣内氏が所蔵されており、それには、法論は万治二年五月廿一日、相手は禅宗の徒とし、事の次第をやや詳細に記録していて、寺院明細帳のノートはこの系図の記事を抄録したものと思われる。²⁰

さて、唐津安楽寺には第六世鏡空が元禄三年に記した安楽寺縁起書が遺っている。²¹鏡空は近江国金森道西の末葉で本山の命で安楽寺に養子として迎えられ、系図に学徳絶倫と特記されている人である。彼は養家の伝統を子孫に継承することを自からの使命とし、その為に寺に残る古文書、養祖父不遠（玄保改名）の口筆に基づきこの縁起書を記したと後書きしている。ところがこの中には一保法論の事も、観世音寺吹挙の事も、およそ学寮にかかわる事項は何一つとして記されていないのである。現任職も現在そのような伝承は全くありませんと申されている。

いま廓然寺由緒と安楽寺由緒とを読み合わせると重要な相違に気付く。法論の相手が禅宗と日蓮宗の違いはともあれ、廓然寺の方は一保が褒賞を賜わっただけであるのに、安楽寺ではその上玄保が加わって観世音寺吹挙――学寮創建の功を誇称していることである。こ

れらを勘案すると、鏡空以降のある時期に安楽寺ゆかりの人物が、弟寺廓然寺に伝わる一保法論に新たに西国随一の古刹観世音寺を合成し、それまでには無かった学寮草創縁起を創作し安楽寺由緒の修飾をはかったと推量することもできよう。

他力の念仏への誹謗は開宗以来つきまとっていることで、一保法論の事もあったかも知れず、老後の一保の追懷を筆達者な子孫が廓然寺開基の逸事として寺誌に書きとどめたとすれば、多少の粉飾が加えられたとしてもあながち無稽とは言えないであろう。しかし安楽寺由緒に至っては、無名の一田舎僧の献言と斡旋により学寮起立の重大事が執行されたとは考えられず、この伝承をそのまま承認するには余りにも不自然な感を免れ得ない。またこの時期の公式文書に学寮の存在を裏付けるような記事も見当たらない。

安楽寺の縁起談が学寮に伝わったのか、それとももっと古くからあったものか、学寮内に観世音寺移籍説がささやかれていたような気配が感じられる。それは筆者不明、年代は安政以降と推定される『学寮草創記』²²という小冊子がつぎのように記しているからである。

「扱、講堂ト称スル事ハコレ私ニ非ス、西国ニ大地ノ講堂ト申スガ廃退シテアリ、ソノカブラカフテソレヨリ大講堂ト称ヘシ事也

」

安楽寺由緒とは別の立場から観世音寺学寮移籍を述べているのは、嗣講小栗憲一著『豊絵詩史』である。その要は、

「初めて東本願寺が学寮を創建した時、恵空を初代講師に任じた、恵空は当代九州切つての碩学豊後国日田長福寺通元に書を送り、巨刹観世音寺学寮の名義を移す斡旋を懇請した、通元は苦心の末これに成功し、ここに高倉学寮の名が始めて立ったのである、恵空より通元への懇請書簡が現に長福寺に所蔵されている、それは差出人、名宛人の部分が欠裂しているが恵空より通元に宛てたものであることは間違いない——以上祖父東海師の直話を後学のためにここに記しておく——」

というものである。²³

恵空が講師に任じられたのは正徳五年（一七一五）とされるから、これは学寮創立を寛文五年より五〇年繰り下げることになる。この三巻の著は文部省の要請より五年前明治十七年の刊行で、同じ九州人である細川千巖も読んでいた筈である。それは『沿革略誌』が東本願寺とは何のゆかりもない観世音寺を唐突に持ち出す理由として——当時ノ制度ハ漫ニ学舎ヲ建ルヲ許サレス——と述べているのは、『豊絵詩史』の——当時幕府之制、新規ニ事ヲ設クルヲ嚴禁セリ、苟モ旧例無ケレバ概斥シテ允サズ——をそのまま援用していることから明らかである。安楽寺由緒にも書かれていないこのもつともらしい理

由づけは後々まで使われ通説化して行く。しかし西派や高田派の学林、また一般の学塾などで他よりの名跡移籍が必要であったとは聞かず、当派のみそれを唱えるのは著しく必然性を欠き、ただ観世音寺継承を生かしたいためだけの無理な理由づけといわざるを得ない。

もし千巖が『豊絵詩史』説を採用しようと決意したならば、寛文中は御壁書の御下賜だけ、学寮創立は正徳五年と五十年繰り下げればよかったわけである。後に岡崎正謙氏が『豊絵詩史』説を強く否定したのは、自説寛文四年創立を確実な史実として固執し、それと恵空の年譜の不整合を理由としている。（「草創期に於ける大谷派宗学の史的考察」）。千巖もまた同様に恵然の寛文中創立を何とか生かしたいとの執念から、年代の整合する安楽寺伝承の方を採用したのではなからうか。

武田統一氏は、『粟津日記』寛文十二年六月十八日琢如の「講堂観音院へ御成」の記事に着目し、まだ独立の講堂を持たなかった寛文のころ仮講堂として東坊ひがしのぼを使っており、この観音院は東坊のことでその名は観世音寺学寮の名跡移用によるものと推量しておられる（『真宗教学史』）。実は東坊には由緒不詳の古仏如意輪観音尊像一体が安置されている。高さ35cmの厨子に納められた蓮台とも28cm、御内仏ほどの小像であるが毎年正月三日だけ開扉する秘仏である。

観音院と名のる堂宇の本尊とするには小さ過ぎるうらみはあるが、或いは武田氏の推量どおり東坊前身の小堂宇が観音院と呼ばれていたのかも知れない。しかし宗祖と観音菩薩とは浅からぬ縁があり、本山が観音院を持っても不思議はない。寧ろ逆に九州出身所化が、観音信仰の総本山は筑紫観世音寺で本山の観音院はその分院とでも言い出し、やがて学寮移籍説となり安楽寺の学寮草創縁起の創作にまで尾びれがついたのかも知れない。

観世音寺にかかわる資料は以上の三にとどまる。

玄保・一保兄弟・通元・小栗憲一・細川千巖と観世音寺説にかかわる人々はみな九州人であり、それ以外の学寮草創史料には観世音寺の文字は全く顔を見せない。何か九州人の郷土愛が作り育てた伝承のように思われてならない。

なお観世音寺調査でも、学寮にかかわる資料も伝承も全く発見することはできなかった。

それにしても、一体観世音寺から何を受け継いだとするのであろうか。『安楽寺由緒』と『学寮草創記』では「講」をとり入れたとする。往昔観世音寺で開かれていた講会の様式を継いで「夏講」制を始めた、これを以て学寮の創立とするもののようである。『豊絵詩史』では、「学寮の名」を継ぎ、更に建築様式も講師・寮司の職名もすべて踏襲したとしている。『沿革略誌』は「学寮の名」を移

したとし、以後「名を移し」が通説となるが、なお橋川教授は「学寮の規模を移し」とされている（『真宗史要』）。大体古代の官寺は官僧養成の機関でもあったから、七堂伽藍も僧侶の勤行もすべてがそのまま学問所であって、これ以外に別に「学寮」という名の機構や建築があったとは考えられぬ。強いて観世音寺移籍説をとるならば「講」の継承とした方がまだしも無難であろう。

3 涉成園・東坊・御長屋講堂 説

涉成園（枳殻邸）

『沿革略誌』は「観世音寺ノ学寮ノ名ヲ移シ本寺別邸涉成園ノ一部ヲ以テ之ニ充タリ」と述べているが、涉成園云々の記録はどの文献にも見当たらない。これもまた後々三点セットの一として定説化するが、実は『沿革略誌』の創作である。

大谷大学に『御境内町絵図』一幅が所蔵されている。134 cm × 270 cm の大絵図であるが、ほぼその中央に御隠居御屋鋪と記した一万坪の涉成園がある。その敷地内西側の部分は十四間半幅で人家が並び、その中央部、間口二十五間約三六〇坪に「学寮」と記入されている²⁴。この絵は元文五年（一七四〇）の製作で、高倉学寮新築の十五年前であり、これが高倉以前の学寮所在地を示す唯一の資料である。『沿革略誌』の涉成園云々は、この絵図の「学寮」をとって学寮創立の

地に擬したものと考えられる。

東坊講堂説

東本願寺の正面、烏丸通り一つ隔てて東坊（^{ひがしのぼう}現東光寺）がある。この寺に「由緒古伝」があり学寮草創の地と伝えている。それは、「この地に小堂宇があり、了海なる者が講師を申し付けられここで講釈をした、すなわちこの地が本山最初の学寮地所である、後に学寮が高倉へ転地したのでこの小堂宇をそっくりそのまま了海に賜わり、その子了円が一寺を開基し東坊と号した」というものである²⁵。

東坊前身のその名を忘れられている小堂宇が或いは「観音院」と呼ばれていたかも知れないとの推量は前に述べた。東坊古伝はこの後直ちに高倉移転としているが、了海没後高倉学寮新築までに約八十年の間がある。古伝の書かれた明治十一年の頃は学寮の事歴についてほとんど無知であったことが推量される。

この古伝には信憑性があるように思われる。東坊の位置が本山の目の前という地の利があつて御堂衆がここを研集会場として集まり住職了海がその世話役を勤め講義もし、また同時に堂僧や末寺の子弟の修学する私塾として利用されていたとも考えられる。いわば学寮の萌芽がここに芽生え、やがて独立の講堂を必要とするまでに成

長して行くと考えてよいであろう。

東坊はその後長く御堂衆の枢要な地位にあり学寮奉行としての東坊の名がしばしば文献に表われる。従って了海の名も長く伝承されてきたのであろう。しかしこの故事を以て直ちに了海を学寮開祖とすることはいかに彼がすぐれた学匠であったとはいえ周囲の事情から推して早計に過ぎるであらう。

御長屋

「学寮」の名称が定着するのは高倉学寮新築以降であり、それ以前文献では学寮・学林・学養・講堂・所化寮・御長屋などと一定しない。しかし公文書では「御長屋」が多く用いられていたようである。²⁶

高倉学寮以前に講堂・所化寮があり、それが「御長屋」と称されていたことは確かであるが、その所在地・構造などを記した文献はない。高倉学寮新築の十五年前製図の『御境内町絵図』にある涉成園内「学寮」がそれであったと推定されるが、この約三六〇坪の敷地の中にどのように講堂・所化寮が建造されていたのか、推量する手がかりは全くない。二代講師恵然も三代講師恵琳も共に御長屋講堂で蛭雪の功を積み学匠の最高峯に登りつめた人物である。『年代悠邈ニシテ』などと言わずに、自からをはぐくみ育てた最も身近な

母校「御長屋」の姿をなぜに書き遺してくれなかったのかと甚だ残念である。

御長屋創建についての唯一の文献は『往還寺由緒書』²⁷である。それによると、

「能州鵜飼妙嚴寺寺中往還寺の新發意圓澄は延宝五年常如上人に召出され樹心と改名、以後常如・一如両門跡に仕えて甚だ寵遇され講談を勤めた。翌延宝六年（一六七八）、講堂創設の要を献言し程なく御長屋が造営された、その後泉州大津南溟寺を拝領、天和三年（一六八三、三五歳）寂、その節一如上人は樹心は御長屋開基であると仰出され、命日には御長屋で月並の逮夜を勤めるよう所化中へ仰渡された」

というもので、延享二年（一七四五）御長屋時代、往還寺智春が認めている。

延宝六年といえば東坊了海没の四年後で、東坊仮講堂から御長屋独立講堂への移行は年時的には整合する。しかし果たして樹心の御長屋が「町絵図」にある涉成園内学寮であるのかどうか、この由緒書だけでは確証し難い。

往還寺ではこの寺伝により樹心を学寮開基と自認し、その後も学寮開基樹心云々の文字をつらねた本山への上申書や寺誌を認めてい

るが、果たして本山ではどう受けとめていたのであるか。『上首寮日記』で見るかぎり樹心忌速夜執行の記事は見当たらないし、また東坊了海に賜わった贈講師の栄典もない。樹心について克明な史料研究をされた日野環氏も寺伝のとおり樹心を学寮開基と顕揚していらる。²⁷しかし本山には生え抜きの堂僧学匠や行財政を一手に握る上檀家老衆が居り、致仕して僅か一年そこそこ、若冠三十歳の新参者の献言一つで直ちに学寮造営成就の運びに至ったとは考えられない。功労者の一人とすることはできても学寮開基の地位に推すことは過褒であろう。

それにしてもなぜ「御長屋」というような奇妙な通称で呼ばれたのであろうか。所化寮が三畳或いは四畳半の長屋様式であったからか。『御境内町絵図』を眺めているうちに、ふとこの場所に涉成園に勤仕する小者達のための長屋があり「御長屋」と呼ばれていたのではなかろうかと気付いた。武家屋敷では馬夫や仲間・折助などのための長屋をその邸内に持つ例は多い。もっとも学寮から北の部分は大邸宅でとても長屋とはいえないが、南の部分はやや長屋の面影が偲ばれる。図面の住宅群は当初の長屋とは相当ちがった形に変わったものとしても「御長屋」の呼び名はそのまま継承されてきたとすれば、樹心の献言によって造営されたとする「御長屋」は此処でなければならず、以後七十余年間ここが学寮講堂・所化寮であっ

たことになる。ただし近在の故老たちにいくら尋ねてみても「御長屋」の呼び名は今日全く忘れ去られている。

『沿革略誌』編集掛がこの往還寺文書を知っていたかどうか。もし知っていたとしてもさきの『豊絵詩史』と同様、既に学寮の通念となつてゐる寛文年間創建に執着する細川千巖にとつてこの延宝六年説を採用するわけには行かなかつたことであろう。

4 高木宗賢献財 説

恵琳講師は「学寮の由来」に「寛文五年乙巳浪華の御門徒高木宗賢献財を献じて学寮を創建す」と記した。しかし寛文年間に独立の学寮建築があつた形跡はなく、この時期は東坊前身の小堂宇を講堂代わりに使っていたとする東坊古伝があるだけである。従つて高木宗賢献財は往還寺樹心による延宝六年の御長屋造営の時のことであろうと見られて来た。平野屋五兵衛こと高木宗賢についての詳細な史料研究はあるが、²⁸新築献財の記録は他の史料にはなくただこの恵琳文書だけである。なぜに恵琳は宗賢の名を書きとどめたのであろうか。これも不可解というより外はない。初代講師とされる光遠院恵空は数ある門信徒のうち特に浪華の豪商宗賢を徳とし「法興最モ高シ、因縁以テ比類スベキモノ無キカ」とまで歎賞している。²⁹門下恵然は老師の膝下にありしばしば宗賢の学寮への貢献を聞かされ、

これに加えて高倉新学寮造営の四年後宝暦九年に宗賢の子祐賢（平野屋五兵衛を襲名）による経蔵寄附があり、学寮機構完成の喜びともども門下恵琳に語り継いだことであろう。かくて恵琳は寛文年間創立と高木宗賢貢献との二つを強く意識しており、それがこの文書に書きとめられたとでも推測できようか。

『御境内町絵図』により学寮の位置は示されたが、その構造についての手がかりは全くない。この敷地に新しく講堂・所化寮が造営されたものなのか、或いは例えば間口四間の棟割り長屋六戸の三戸分の仕切り壁を取り払って講堂とし、残り三戸はそのまゝ所化寮として利用した改装程度のものであったのか、推測のしようがない。いずれにせよ敷地が三六〇坪程のものであってみればごく簡素な造作であったことだけは確かであり、仮に宗賢の献財があったとしてもそれがどの程度のものであったか疑問が残る。平野屋一族の学寮への貢献は疑うべくもないが、恵琳のただ一枚の書によって直ちに学寮創建の功を宗賢一人に帰するのはこれまた過褒といふべきであろう。下って高倉学寮造営に当たっては、普請奉行富井采女・粟津左京、講中肝煎大坂大黒屋・京都尾張屋その他の名が明記されている。³¹これらの確かな人々の業績や苦心を探索する方がより重要と思われるが、残念ながら今のところその手がかりはない。

三 通説への批判と修正

以上学寮草創説三点セットの原型とその典拠、それにまつわるいくつかの事項を検証してきた。それらは確かな史料に依るものではなく、年時の寛文年間・寛文五年は恵然・恵琳の文書から、縁起の観世音寺は『安楽寺由緒』から、その理由は『豊絵詩史』から、場所の涉成園は『御境内町絵図』からそれぞれ切り取ってきてつなぎ合わせた創作であり、その典拠はいずれも薄弱で砂上の楼閣にも似た仮説であることを明らかにしたつもりである。

しかしこれは今改めてのことではなく、先学は十分にご承知であった。創立年時についていえば、大正十三年以降橋川教授、佐々木学長により寛文五年が定説化していたにもかかわらず稲葉教授は敢て寛文年間に戻し（『真宗教学史概説』、大谷大学編『真宗年表』（昭和48）では―寛文五年 この頃学寮を創建する―としている。

武田統一氏は―学寮が草創された年時を寛文四年、あるひは同五年と説くものがあると雖も…いまだ純然たる学寮の風格を備へた生徒の教育機関の設立とは観られないものである―と述べておられる（『真宗教学史』）。これらは恵琳文書の寛文五年説に対する批判修正と見てよいであろう。また観世音寺移籍説でいえば、『大谷大学

『三百年のあゆみ』では筆者はこの伝承を採用していない。それは安楽寺寺伝について数々の疑問点があることの批判を含め今後の再調査・研究を期待しての削除であろうと推察したい。寛文五年創建を採られたのはそれを否定しては創立三百周年が成立しないからであろう。『真宗年表』もまた年時の明示がある一保法論の伝承を載せていない。

今日までの研究成果の多くは、このように多少の疑義をさしはさみながらもなお三点セットにこだわいつづけ、要はそれを確かな事実として成立させたいとの意向で苦心が払われてきたように思われる。学寮草創を語ろうとする場合、材料はこれだけしか無いのだからやむを得ない仕儀であつたかも知れない。しかし断片的な史料によつて推量する限り、この時期にはやがて学寮に至るかも知れない可能性を包蔵した機運が見られるだけであり、それが育てられ成熟してはつきりと学寮の機構を整えたのは、宝暦五年高倉学寮造営の時である。正しくはこの時を以て学寮の創立というべく、それ以前は東坊も「御壁書」も「御長屋」も学寮前史に属するとすべきであろう。姿も整わず名も定まらぬ萌芽的存在のはたらきが公式文書に記録されないのは当然である。史料が乏しいと歎くよりもなぜ乏しいのかに眼を転じるならば事の真相が見えて来よう。『上檀間日記』に恵空の頃からの記事が散見してくるのは、漸次機構が整いその活

動が記録に値するまでに成長したことを示すものである。記録にもとめられない萌芽的草創の時期に学寮の創立を設定しようとする努力自体が無理であろう。

もし宝暦五年高倉新学寮造営をもつて学寮創立とするならば、通説寛文五年より九〇年下げることになり、西派学林の寛永十六年創立より一六六年の遅れとなる³²。できる限り古きに溯らせたいのは人情の自然であろうが、無理な虚構で古さや出自を誇る独りよがりをやめ、むしろ立ち遅れた事実を正視してなぜに真宗学事が他宗に立ち遅れたのか、その中でも更に当派が他派に立ち遅れたのか、そのよつて来たる所以を厳しく問い正すことが今後の学事史研究の重要な課題となるであろう。

なお明治六年八月二十五日、学寮を貫練場と改称、同九月八日学寮改正につき厳如上人より御直諭が発せられているが、それには「茲ニ学寮ノ儀ハ創建以來一百余年…」と述べておられる。これは高倉学寮新築以来一八八年を指すものであり、この時点では高倉学寮造営宝暦五年を以て学寮創建と考えていたことが明らかである。

結 び

本学では、毎年十月十三日を開学記念日とし祝日としている。この日は大谷大学学祖と仰ぐ清沢満之師の「開校の辞」を改めて問い

なおす日である。しかし学寮草創に思いをはせる日は五〇年か一〇〇年に一度、創立三五〇周年とか四〇〇周年とかにめぐり会う時だけである。寛文五年（一六六五）を学寮創立として昭和四十年（一九六五）始めて創立三〇〇周年を設定したからには、恐らく二〇一五年を創立三五〇周年とすることになる。この時に至って漸く草創の次第に関心が寄せられるのかも知れない。しかしその日まではまだほど遠い今日においても、現在の大谷大学にとって学寮草創がどれほどの意味を持つわけでもないとして安直に通説を鵜呑みにし、そのような事実として思いこまれていては困るのである。学寮草創のことに触れる時、通説の典拠やその経緯を十分承知した上で更に口にし筆にして所論を展開されるならば、われわれの共同研究も何程かの意味を持ち得ることになる。

研究員同志の間でも、これらの史料の評価はまちまちであり、その位置づけも一定していない。この試論がこれからの論議に弾みをつけることができれば幸いである。（平成元年十月 記）

註

1 『学寮諸制條』

寛政四年能州法性寺玄鳳謄写『学寮諸制條』その他筆写本、抜萃本等数本大谷所蔵。「校本 高倉学寮諸制條類纂」所収

2 『上首寮日記』

自文政六年至明治四年、全五冊翻刻本第3巻まで既刊（真総研）

3 『真宗教学史概説』昭和十三年六月刊 大谷大学編、稲葉秀賢

教授執筆、予科第一学年の仏典基礎学教科書として編纂。第二・三学年用は『真宗教義概説二巻』

4 調査

佐賀県唐津市 安楽寺 昭60・3

福岡県太宰府市 観世音寺 昭60・3

石川県珠洲市 往還寺 昭62・3

京都市下京区 東光寺 昭63・3

愛知県岡崎市 垣内康司氏（廓然寺系図） 平1・8

（未調査 大垣市廓然寺・堺市南溟寺・日田市長福寺）

『研究所報』・『研究所紀要』

『学寮草創関係資料調査報告』（木場） 所報第16号昭62

『校本 高倉学寮諸制条類纂 編集記』（深田） 〃 〃

『真宗学事資料調査報告』（木場・草野） 〃 第18号昭63

『学寮草創期並に歴代講者出身寺院調査目録』（綿谷） 〃 〃

『史料紹介—本山上檀古記録抜萃』（深田・三本） 紀要第6号昭63

研究会

教権の下で—高倉学寮・宗学の成立（草野） 昭61・2

学寮草創関係資料採訪調査報告（木場）	〃	・ 9
校本高倉学寮諸制条類纂編集報告（深田）	〃	・ 10
昭和61年度資料採訪調査報告（木場・草野）	昭62・12	
高倉学寮草創考	（深田）	平1・9

5 例え

明治28	『本山寺誌』（本願寺寺務所文書科）
〃 34	『真宗高倉大学寮沿革略』（真宗高倉大学寮）
〃 44	『本願寺誌要』（本願寺誌要編輯局）
大正13	『真宗史要』（橋川正）
〃 13	『大谷派本覺沿革略』（『真宗大系』第37卷）
昭和5	『草創期に於ける大谷派宗学の考察』（岡崎正謙）
昭和9	『真宗史稿』（山田文昭）
〃 13	『真宗教学史概説』（大谷大学）
〃 16	『大谷派学事史』（安井広度・桑谷観宇 続真宗大系第20卷）
〃 19	『真宗教学史』（武田統一）
6	『真宗大学寮沿革略誌』外題は『本山報告掛編纂 大学寮沿革記 全』谷大所蔵
7	真宗大学寮（明治一三―二八）の名入りの朱線方眼原稿紙使用『本山報告』 第四拾四号明治二十二年二月十五日

真宗総合研究所紀要 第七号

今般文部省編輯局ヨリ教育史編纂上参考ノ為 本派學事沿革取調之義依頼有之 本寮ニ於テ取調ニ着手致候條 左記ノ條項ニ関スル記録有之向ハ至急取調 來三月五日迄ニ到着候様差出相成度此段及依頼候也

一本寮創設ノ事蹟及未設以前ノ經歷
一講者其他學事ニ盡力セシ人物ノ行事

傳記 墓誌等アレハ之ヲ差出ヘク 其口碑ニ存スル事項ハ要領ヲ記スヘシ

右ノ外 學事ノ沿革ニ關スル圖書記録等アラハ其書名 冊數及ヒ大意ヲ記シ 其他編史ノ資料又ハ参考ニ供スヘキモノハ蒐録アリ
タシ

明治二十二年二月十三日 大學寮

○學事沿革取調 這回文部省ニ於テ教育史編纂ニ付 参考ノ為メ本派學事沿革取調ノ儀同省編輯局ヨリ依頼有リシニヨリ 細川嗣講ヲ取調掛長 江村秀山 廣瀬守一 松平龍舟ヲ取調掛ニ定メ大學寮内ニ於テ同寮及ヒ諸教校沿革取調ニ着手セリ
（昭63 『研究所紀要』第六号 史料紹介『本山上檀古記録拔萃』参照）

8 廣瀨南雄・橋川正『真宗教義及真宗史』大13

「この布教の発展と共に學事の勃興も著るしく寛文五年に大宰府

観世音寺の学寮の規模を移してこれを別邸の涉成園（枳殻邸）内に置き、学寮と呼んで一派教育の機關とした。」

9 「大谷大学樹立の精神」 佐々木月樵 大14

「本大学は、今を距ること259年、寛文5年筑紫観世音寺の大学寮を京都枳殻邸に移したのがそもその始めである。爾来、長く大谷派本願寺子弟の修道院であつた。」

10 「大谷大学三〇〇年のあゆみ」 柏原祐泉 昭40

「わが大谷大学の歴史は、一六六五年（寛文五）の学寮創立にはじまる。すなわち、大谷派の宗学は、すでに近世の初頭から、慶秀・円智などの学僧により、さかんに研鑽されてきたが、やがて、末寺子弟の教育機関が必要となり、第一四代琢如上人の配慮と、第一五代常如上人の努力によって、この年、東本願寺の別邸涉成園（枳殻邸）内に、はじめて学寮が設けられたのである。しかしやがて、この学寮の規模は、増加してゆく所化（学生）のために、はなお不充分となり、講義の場所を寺内の東坊に移す状態となった。そこで、一六七八年（延宝六）、新しく涉成園外の西側に講堂を新築し、学寮の諸設備を整えたのである。これは、時の講者樹心（法海院）の建築によるが、資財などに多くの援助をしたのは、大阪の両替商平野屋五兵衛（高木宗賢）であつた。かくして学寮が整備されると、宗学はますますさかえ、所化の数も一層増

加の一途をたどるが、それは、一七一五年（延徳五）に初代講師となつた恵空（光遠院）の時期に、一画期をなすにいたつた。」

11 「御壁書」 『学寮諸制条』所収、註1参照

「学寮諸制条」写本は数本あるが、いずれも冒頭に「御壁書」を掲げ、後に「寛文年間御壁書」として重視される。

12 着帳 夏講開講の前日、懸席志望者は学寮知事所へ出頭してその名を登録し、知事当役は隸名帳に記載する。この隸名帳には初

入年度・懸席年数が記録され、後寛政三年（一七九二）懸席年数十六年以上の所化に擬寮司―寮司の学階を与えることになる。

13 「恵然建議書」 『大学寮沿革記』（註6）所収、「校本 高倉

学寮諸制條類纂」所収

14 恵琳筆「学寮之由来」 能州鶴飼往還寺所蔵

写本 谷大蔵『学寮法則』所収。昭和六一年六月往還寺調査。大谷大学蔵の恵琳真筆講義録と照合し恵琳書と認証。日野環氏（樹心伝・註27）・『大谷派学事史』・武田統一氏『真宗教学史』は第五代講師香月院深励の書として紹介している。

15 註8参照

16 「往還寺由緒」 智春筆 延享二 能登往還寺所蔵

写本「学寮法則」（谷大蔵）所収 註27参照

17 「本山上檀古記録抜萃」 谷大蔵『高倉旧学寮諸条規并本山記室

記録』所収

この冊子は「真宗大学寮」の名入りの朱線方眼原稿紙を用いている。主として『上檀間日記』よりの学寮記事抜萃ノートであるが、

「安楽寺由緒」等の文献をも収録している。註18参照

（『研究所紀要』第六号（昭62）史料紹介『本山上檀古記録抜萃』参照）

18 「安楽寺由緒書」 谷大蔵『本山上檀古記録抜萃』所載

「将又玄保弟一保^与申者、淳寧院様御代於御寺内日蓮之徒難問之時、其頃一保事東山南禪寺へ為勤学在京いたし罷在ひ處、南禪寺へ駈付日蓮徒ヲ降伏仕候、其御感之餘り御殿ニ被為召、御懇之御意被成下、廓然大悟之者ト御感賞被遊ひ、其時之御意ニ肥前之國ト申テハ遠國之事故、ケ様成時節甚心元なくひ得ハ、近國ニ有之度旨被仰ひ、仍之濃州ニ一字建立いたし、則 淳寧院様御感賞之御意ヲ以大悟廓然寺ト被成下 御免、開基ト相成ひ事ニ御座ひ、且高倉講堂之義、筑後國太宰府觀世音寺ニ在之候講ニテ御座ひ處、日蓮之徒難問之後、一山ニ学寮無之ひテ者無心元之段被遊 御意候ニ付、玄保兄弟ニテ御吹挙申上候テ、御當山ニ御引ニ相成ひ」

19 廓然寺 寺院明細帳 谷大蔵『本山上檀古記録抜萃』所載

○明治十二年更正寺院明細帳 抜萃

岐阜縣美濃國不破郡久徳村一番地

真宗総合研究所紀要 第七号

真宗東派 大悟山 廓然寺

開基 玄昌 肥前國松浦郡唐津安楽寺玄保弟

創立 永昌十癸酉七月二日

「開基玄昌^者万治二年琢如法主ノ時、南禪寺ヨリ本宗エ對シ法門諍論ノ端ヲ開キシニ、右玄昌問答往復シ遂ニ勝利ヲ得タリ、其褒賞トシテ法主ヨリ七條・五條・念珠等ヲ授與シ廓然寺ト命セラル、後帰依ニヨリテ當地ニ一字ヲ創立ス」

○記室記録 抄

美濃國不破郡久徳村

大悟山 廓然寺

明暦二丙申年二月、肥前國松浦郡唐津安楽寺第三世不遠^{（四ツ）}（玄保）法

弟玄昌創建

○明細帳 寺蹟部 抄

廓然寺

堂 班 協間昇階 万治三子年四月十九日許可

本 尊 御裡 常如法主 願主 玄昌

延宝五年二月十五日

祖 師 真 影 御裡 一如法主 願主 玄昌

天和三癸亥年仲春廿四日

太子高僧絵像 御裡 一如法主 願主 玄昌

元禄七年六月廿七日

蓮如法主絵像 御裡 常如法主 願主 玄昌

延宝七己未年九月下浣

20 廓然寺系図 岡崎市 垣内康司氏藏

廓然寺縁起（一保の欄註記拔萃）

玄昌（一保） 元禄十四年四月十六日寂

「廓然寺開基ノ儀ハ肥前ノ国松浦郡唐津安樂寺舍弟玄昌 一保又一峯 ト申ス者、為修学京都南禅寺ニマカリ在候処、万治二年ノ頃一人ノ禅僧御宗門ヲ難破仕、於所々貶毀イタシ其智弁他ニ異リ候故、諸人致随喜弘願ノ一法ニ疑惑ヲ生シ候処、右禅僧二三輩ノ門弟ヲ誘引シ同年五月廿一日御本廟ノ御門前ニ場取り念佛ノ一法ヲ云クズシ、是ニ應答スル者アラバ可進出ト高言ヲ放ソ所ニ玄昌進ミ出テ、念佛往生ノ証拠経釈ノ明文引並ベ禅僧ト問答イタシ、責掛々々申結候処、右ノ僧答フル事不能屈伏仕候ニ付、問答ノ作法トシテ禅僧ノ朱令打破リ三衣ヲハギ取り散々ニ打擲仕候得ハ半死半生ニテ逃去申候、此段琢如上人様達御上聞、一宗巧名ノ者ナリト御感悦被遊、為御褒美御所持ノ御珠数七条并五条ノ御袈裟絹衣等拝領仕、夫レヨリ常随給仕可仕様被為仰付、身分ノ儀ハ飛椽ニ御取立、寺号ヲ廓然寺ト御免被成下、則万治三年四月十九日御

印書頂戴仕候テ琢如上人様常如上人様両御代都合十八ヶ年御給仕奉申上候、其後延宝五年頃一寺建立仕度所望有之二付御本尊ノ御裏等願上候処、御木像并寺号ノ御免許 延宝五年二月十五日肥前国松浦郡唐津廓然寺ト被成下、御印ニハ青色ノ御割印被成下候、其後美濃国不破郡久徳村ニ相止リ一寺ヲ建立ス、廓然寺則是ナリ」

廓然寺第八世鶴慥は明治十七年寺を原大瑞に譲り、本山に致仕して諸国を巡回したが、垣内氏を称し愛知県岡崎市に定住、明治廿八年嗣子一峯が同市伝馬町に薬舗を開き今日に至っている。鶴慥は系図だけは携えて寺を出たのであろう、それは現当主垣内康司氏が所蔵されている。廓然寺は更に中村氏に代わり、開基一保の故事はほとんど伝えられていない。

なお廓然寺には左の彰如上人の御墨付きが所蔵されている。

美濃国不破郡静里村 廓然寺

其寺開基一保 高倉学寮創建ノ際功勞不尠ニ付 今回功績追賞ノ尊慮ヲ以テ壹貫代法名御染筆下賜被遊候事

大正三年五月廿日

寺務総長 大谷 瑩誠

(法名)

開基 廓然寺釈一保

釈 彰如

大正三年、すなわち真宗大谷大学発足後五年という時期を背景としてこの草創古伝の公認がなされたとすれば、そこにはある意味が含まれていたかも知れない。とにあれこの門主御墨付きは宗門学者の学寮草創研究の筆を洩らせることになったのではあるまいか。

また廓然寺明細を仔細に検討すれば、創立が永昌^{つぎ}十三年と明暦二年の二つあること、明暦二年は一保法論の三年前であることなどいくつかの問題が残る。

21 鏡空筆 「安楽寺縁起」 安楽寺所蔵

縁起

「肥之前州上松浦郡唐津安楽寺ハ 濫觴ヲ尋レハ 京本願寺譜代ノ端坊也、往シ文禄年中ニ大將軍秀吉公 為征伐異国発向当国名護屋ノ刻 本寺ヨリ端坊明然下国シテ構一字 即号端坊 干今名護屋汝茜屋町ニ其敷地アリ、歴年成島処人字端坊屋敷、然ニ其比本寺上人顕如遷化ニ依テ 文禄二年之春大僧正教如為繼目 当国ニ下リ於端坊暫休高駕於名護屋陣中秀吉公対面シ給、従本端坊境内ニ六房並居テ毎ニ守寺務、遠近之一派ハ悉ク明然ノ支配ニ預リ

テ宗儀ヲ嗜 一宗之繁栄最異他、所々ノ末寺支配之簡状今ニ在之、扱テ大僧正帰京之後 秀吉公御在陣之内モ御目見ヲ遂ルハ諸寺ノ中不過四ヶ寺、端坊其随一也、尔ニ明然ハ我祖順了ニ遺跡シテ本寺へ上レリ、厥后秀吉公軍勢ヲ小西行長・加藤清正両將ニ令執權大坂へ登リ給ヒ一兩年ノ後異国平治ノ比ニ及テ寺沢志摩守広忠公ニ賜於唐津築一城、其時順了斯処ニ移ル、幸哉国主広忠公懇意不浅 当所町割ノ最初ニ任意境地ヲ可構ト言フ、此ニ望ノ俟ニ今ノ呉服町ニ届テ端坊ト名乗ル、慶長元^丙申年也、六房モ相續テ来ル、端坊本尊ハ絵像ノ弥陀教如上人之御裏書顕然而今ニ拝ス、其後五三年ヲ経テ順了上京之時教如上人改端坊安楽寺ニ賜木仏同時ニ御免ノ御印在之、其ヨリ次第第二六房各寺号ヲ賜、善海房本勝寺^{居米屋町}・順海房安浄寺^{居新町}・了善坊行因寺^{居米屋町}・了休房伝明寺^{居平野町}・龍泉坊正縁寺^{居新町、是ハ延宝之頃私意ヲ以テ西本願寺ニ帰ス}・永元房^{是ハ八百屋町}、然ルニ當時ノ本尊ハ御長二尺五寸ノ弥陀行基菩薩之彫刻也、元ハ当国五ヶ山之内天川村西光寺^{禪宗}安置ス、然ニ或時示現而言ク山林ノ化ヲ隠シテ聚洛ニ顕現而広度衆生ヲ山中和泉ト云者ニ可迎云々^{是ハ寺沢公之武士} 即住持任告勅時彼ノ檀越等悲歎云、斯尊ハ古今伝寺威神靈仏也、詎ソ渡他哉ト、仍再ヒ寺ニ雖迎本尊ノ告命数度ニ及テ遂ニ和泉カ所ニ来臨シ給、幸此人当寺之門徒也、被此歓喜不浅而即日当寺ニ奉移、依之順了謹テ思ク念仏弘之本誓此道場有縁之靈験也ト、仍テ其

ヨリ拝之、縁起事長略之、初ノ木仏ハ今本勝寺ニ令安置是也、次
頭如上人御影慶長十四年五月廿九日教如御判願主順榮也、祖影并
太子七高祖ハ元和六年五月六日宣如御判、此上人十七歳而始テ立
筆之御銘アリ、御絵伝ハ寛文二年六月二十八日琢如御判願主玄保
也、同三年ノ冬鐘樓ヲ作ル、琢如上人御影ハ延宝三年正月廿九日
常如御判徳保之願望也、上件者書記ニ由シナシトイヘトモ本尊ニ
因ミテ戴之、其外御印之免狀数通頂戴ス、就中嘯之御影ヲ本寺ヘ
上奉セシハ当寺ノ先祖也、其時宮内卿法橋被遂披露所ニ乱世ヲ忍
經テ当御門跡ヘ奉指上事御感之御印干今在之、然者遠国辺夷而本
寺ノ參勤疎也トイヘトモ教如上人ヨリ代々本寺ノ憐愛他ニ異ニシ
テ免許ノ礼封マテ毎度減少セリ、適參詣ノ砌ハ尊愛不淺而於鶴間
御盃頂戴 則必御手ツカラ御肴ヲ下サル、御暇乞ノ時ハ定リテ奥
ノ御座ニ召テ独リ過量ノ尊命ヲ奉蒙事常如上人マテ毎度尔也、是
亦當時ノ面目比類希也、然ニ痛哉、時遷リ処革テ遠方ノ与力ハ或
帰別家 近隣之末寺ハ或衰テ音信絶タリ、今纔ニ残テ昔ノ半ニモ
不_レ定、誠ニ古ハ大僧正高駕ヲ当寺ニ休メ 天下ノ大將軍ニ面謁
ヲ遂ケ、於九州ニ一宗再興之旧迹ナレトモ今ハソレトタニ知ル人
稀也、後代ニ至リナハ弥ヨ展転忘却之嘆有ラン歟、依之記斯一卷
粗伝当寺之縁起者也

右一卷者披当寺数篇之旧記并以不遠^{當時}老師之口筆僅ニ録縁起之
一二ヲ、事実而最所無毫異也、然予ハ江州金森道西カ之末葉而雖
非当寺之的胤 貞享元年之夏比以本寺之尊命令繼当坊之後裔、是
不慮之任職抑亦宿縁之所為乎、以茲懇ニ糾往而貼之於永業者也

維時元禄三歲次庚午之冬誌焉

住持 鏡空律師 智山^{（永世）}□

22 『学寮草創記』 谷大藏 年代・筆者不詳

この小冊子は、高倉・講師・寮司・知事・所化・講堂など学寮名
目の語源を広く仏典を渉猟して考証した博識の書である。開悟院
靈暉の名が出ているので安政以降の作かと推定される。

23 『豊絵詩史』三卷 小栗憲一著 明治17 谷大藏

江戸後期豊前・豊後地方は多くの文化人を輩出したが、その中よ
り選んだ画家・詩人・学匠十八名の偉人伝である。著者は豊後国
善教寺小栗憲一嗣講で同妙正寺小栗栖香頂講師の弟である。この
中で豊後日田長福寺贈嗣講香光院宝月の所伝を述べるに当り、そ
の尊父通元もまた碩学であつたことを記し、学寮とのかかわりに
及んでいる。

「初西京_三本山_三創_二建_一學_三。使_二惠空_一幹_レ之。當時幕府之制。嚴禁_二新_レ規設_レ
事。苟無_二舊_一例_三者。概斥而不_レ允。惠空憂_二新_レ贊之無_二名義_一。致_二書_一于通元_一
曰。聞_二太宰府_一觀音寺。為_二舊都督府之巨刹_一也。在昔有_二學寮_一之設也。必矣。

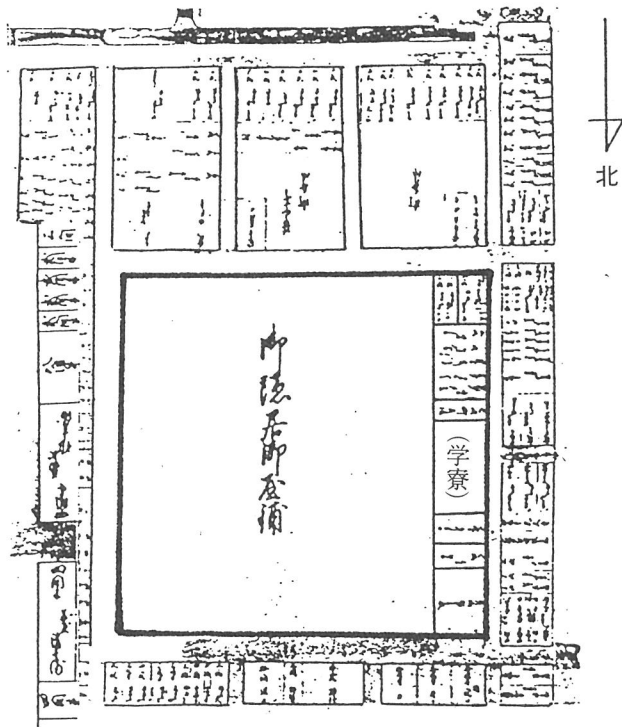
今復興其名義。移之西京。則官未必不允准焉。請師服其勞。通元然之。乃往筑紫。遍討古庫。獲古圖記冊。遂與土人謀。請官得允。由是高倉學寮之名始立矣。故講堂構畫。一法古式。講師寮司之目。亦胥襲其舊云。

案長福寺古簡中。藏惠空手書。其大意如本文所述。然紙尾缺裂不詳名字。家祖父東海告余以為贈元公之書。故記以示後。

24 『御境内町絵図』 谷大所蔵

寛永十六年
御拝領新御寺内絵図
元文五年庚申六月
御境内町絵図
当時改之以間尺帳記之
奉行 鈴木 修理
木村弥左衛門
福岡作右衛門
畫図

涉成園部分図



(この図面は南北が逆になっていることに注意)

涉成園西側屋敷図

		(間 口) 南北	
A	A	松本主殿	西18間
	B	萬屋弥右エ門	7 〃
	C	富井采女	7 〃 半
B	①	学 寮	(25 〃)
C	E	御屋舗	7 〃
	F	酢屋弥次兵衛	4 〃 4 尺
	G	酢屋弥次兵衛	2 〃 4 尺
D	H	森川 左中	4 〃 半
	I	佐渡屋久右エ門	3 〃
	J	酢屋弥右エ門	5 〃
	K	鬼頭元右エ門	5 〃
	L	会所	2 〃 1 尺 8 寸
	M	丸屋弥兵衛	7 〃
			南 3 〃 4 尺
E	N	松屋八郎兵衛	5 〃
F	O	居升屋五郎右エ門	3 〃
G	P	井筒屋清兵衛	3 〃
H			(奥行) 東西
I			14間 4 尺
J			
K	N	O	P
L			
M			

北
4

この図面には精確に寸法が記されているが「学寮」だけ寸法がない。手製の物指で計ると約二五間である。現在は枳殻邸の表門広場に当たる。C宅の富井采女は十五年後の高倉学寮普請奉行であ

り(註31参照)、現在は故橋川正教授の自坊佛願寺となっている。

25 「東坊古伝」 藤沢了覚筆 明治11 東光寺所蔵

(昭63・3 調査訪問)

東坊古伝

「傳説曰、當寺ハ本山最初ノ学寮地所ニシテ 即チ了海ナルモノ
講師被申付御堂衆坐席ヲ給フ、然ル處高倉ヘ学寮転地ニ付旧地并
講堂本尊經藏等悉皆了海ニ賜フ、依之其子了円一寺ヲ創シ東坊ト
号ス、御堂衆相勤ム、其後連綿御堂衆勤仕ス、又嗣講或ハ洛陽飛
橡定衆被申付候者モ有之ト云々

明治十一年十月 住職

権少講義 藤沢 了覚

了海 承応二年(一六五三) 西派学林の能化西吟の講釈に対し月感
が公然と批判、承応の関牆と呼ばれる事件となる。翌々明暦元年
幕府の裁定があり月感は追放され学林は破却された。廓然寺一保
が禅宗の徒を屈服させたと伝える万治二年の四年前である。了海
は月感の門弟で、後に師と共に東派に帰属、学匠として重用され
た。『文類聚鈔直解』十巻の著がある。延宝二年三月二十五日寂、
大正一三年贈講師。月感は大正一一年贈講師。
東坊古伝を最初に公表しこれを学寮創設とし―世に了海を学寮の
開基と称してゐる―と紹介したのは岡崎正謙氏である。

岡崎正謙『草創期に於ける大谷派宗学の史的考察』昭和7『宗学研究』4号

「京都東坊^{ひがのぼう}に傳ふるところに依れば、草創當時の學寮は、未だ講堂などの設備もなく、講釋等の如きは暫時東坊に於てなされて居つたと(註五)云ふ。これ當時の學寮講者が、次章に述ぶる東坊了海であつたのに基くものであらう。かくして大谷派の學寮は兎に角本願寺派の仲街學林に對して、最初の産聲を擧げたのである。

(註五) 橋川正氏『眞宗教義及び眞宗史』にこの説をのせてゐる。
岡崎氏は橋川正氏『眞宗史』引用としているが、『眞宗史要』にこの記述はない(註8参照)。東坊訪問の折、橋川正氏の御母堂は東坊出自であることを教えられ、その關係からやはりこの古伝発掘は橋川氏であらうと考えられる。橋川教授の門下生であつた岡崎氏が講義の合い間にでも聞いた話を、誤つて『眞宗史要』所載とされたのではなからうか。

なお東光寺の敷地は一五〇坪である。

26 御長屋 『上檀間日記』

宝曆四年五月一日

以口上書申上

御長屋講堂并所化寮漸々及破損申上、當夏講釈相済申上ハ、來夏迄

眞宗総合研究所紀要 第七号

之内御修復之義奉願上、以上

戊五月朔日

華藏庵^(忠然)

惠琳

德應寺

東坊

御家老中様

右願之通御免思召入有之申間、追而致方可申上旨、於上檀之間申渡ス

(この申請を受けた従如は移転新築を決断、翌宝曆五年高倉學寮竣工となる。)

27 『往還寺由緒』智春筆 延享二

能登鶴飼往還寺 所藏

写本『學寮法則』谷大藏所収

27 由緒

「往還寺先祖圓作新発意圓澄儀 泥洹院様御代延宝五丁巳十月御奉公ニ被召出、法名樹心と被遊 御改、御堂衆役被為 仰付上。

其節 御真筆之法名頂戴仕、并ニ御召之七條之御袈裟奉拝領冥加ニ叶申仕合ニ而御奉公ニ罷出申候。其趣者延宝五年閏十二月十日に粟津右近殿分定蓮寺正益を以圓作方江直筆之御紙面ニて委曲被仰越上。則其御紙面于今所持仕罷在申候。然処ニ延宝六年ニ 无

导光院様新御門跡様ニ被為成 夫より 而御門跡様 樹心ニ被為
加御哀憐を、毎度奉蒙難有御意申ひ。殊ニ御奉公ニ被 召出ひ翌
年より講談被為 仰付相勤申ひ。其節迄於御本山ニ講堂無御座ひ
ニ付、樹心奉願上候者西御本寺ニ者講堂有之ひ得共、当御本山ニ
未タ講堂無御座ひ儀歎ケ敷奉存ひ。何とぞ御建立之儀被為 仰付
被下候者難在可奉存旨奉願ひ得者 而御門跡様 樹心願之儀 御
満悦ニ被為 思召候趣ニ而早速御造宮之儀被 仰付ひ処無程成就
仕、則於右御長屋ニ始而亦樹心ニ講談被為 仰付、殊ニ今度者講
堂奉願上ひ為御褒美と御堂衆役乍相勤紋白之袈裟被為 遊御免、
難在仕合ニ而講談相勤申候。然処ニ 而御門跡様より講談相勤申
内にも難有 御意にて 御真筆之御書翰被成下、別而 无导光院
様より御厚情之御書翰数度被 成下ひ。右御書翰等干今数通難有
致安置罷在申候。然処ニ樹心御奉公相勤申内、泉州大津南溟寺を
拝領被為 仰付ひ。然共病身ニ御座ひ故寺拝領之儀乍恐御辞退申
上度旨申上ひ得者 而御門跡様より重而之御意ニ者 思召有之拝
領被 仰付ひ間無辞退入寺可仕旨 御意被成下候ニ付難有奉拝領
入院仕ひ処ニ、其後無程被為遊 御免冥加ニ叶申難在仕合ニ而寺
務仕申候。併常ニ在京仕 而御門跡様江御給仕申上罷在ひ処 御
袈裟・御珠数・御時服等数度拝領被為仰付ひ。就中延宝九年 御
門跡様・御君達様御遷化之時分御葬式御供被為 仰付ひ処、装束

之分不殘拝領被為 仰付、殊ニ茶色之御法服被為下候而染直し着
用仕候様ニ被 仰渡ひ処、樹心申上ひ者染直し申候而者拝領之印
も無御座ひ間此低着用仕ひ様ニ被 仰付可被下旨奉願上ひ得者願
之通其低着用可仕旨亦被 仰渡難有奉存候、其低致着用御供仕申
候。其外樹心一生之間拝領仕ひ物者難尽筆紙ニ程之事ニ御座ひ得
共、悉南溟寺ニ留メ申候。種々拝領之内往還寺ニ致安置ひ品者、
泥洹院様より樹心頂戴仕ひ 御直筆之法名并御奉公ニ被召出ひ節
奉拝領七條之御袈裟、且亦无导光院様、新御門跡様ニ被為成、始
而大品之九字十字之御名号ニ御名御印迄被為 遊、則樹心を御座
所江被遊 御召、御机之上より御直ニ拝領被為 仰付ひ。則右
御名号を御手ニ被為持 御意之趣者是者御書習と思召遊候、其方
ニ可与何ぞ望ハなき歟、望あらハ書て遣と御意被成下ひ。其時樹
心往還寺と寺号を被遊下ひ様ニ奉願上度存ひ得共、余リニ恐多ク
申上兼心願斗ニて唯頂戴仕 一生之殘心此事成旨申残しひ。其後
御所持之 御墓樹木之御珠数拝領被為仰付ひ。是も樹心を御座所
江被為召、御直ニ被為下ひ。右之品々者往還寺へ指下し申度旨
御門跡様江森川小十郎殿を以樹心奉窺ひ処、任望往還寺方へ指遣
し可申旨受 御意を、則指越申候。右御意之趣者小十郎殿ハ紙面
を以樹心方へ被仰越ひ。其紙面も所持仕申ひ。然者右之品々者往
還寺奉拝領同前之趣ニ罷成、別而難在頂戴仕干今致安置罷在申候。

且亦往還寺木仏寺号之儀、延宝六年二樹心奉願上_レ得者早速被遊御免、然処寺号者冥加之御礼二而御免被為下、木仏之儀者粟津右近殿より往還寺へ御寄附二而御座_ハ。則直筆之寄進状所持仕罷在申_ハ。右樹心儀者圓作惣領新發意二而御座_ハ得者往還寺住持可仕者二御座_ハ得共、南溟寺拝領被 仰付_ハ故往還寺者妹二相譲_リ作傳与申僧入聲二仕為致相統、樹心者一生南溟寺二在寺仕申候。然処二樹心実子無御座_ハ二付、右作傳新發意六歳二罷成_ハ得者を延宝八年之春南溟寺へ引取申_ハ処、其年九月二十一日二御門跡様南溟寺江被遊 御成、御機嫌能終日被為入、其上右新發意 御目見へ被為 仰付、樹心養子二可仕旨被 仰渡、則粟津右近殿名付親として 御門跡様被遊 御好ミ民部と名を被下難有奉存_ハ所、樹心儀終二天和三年五月十一日二於南溟寺病死仕、院号法海院と 御免被下候。然ルニ其節 御門跡様より樹心儀者御長屋開基之趣被仰出、則樹心命日二者於御長屋二月並之連夜相勤_ハ様所化中江被仰渡_ハ旨承伝へ申_ハ。依之右養子二被仰付_ハ民部儀、天和二年六月十七日二法名圓心と相改得度被為 仰付_ハ二付、法海院落命之後早速南溟寺住職被為 仰付寺務仕申_ハ。是亦作傳惣領新發意二而往還寺相統可仕者二御座_ハ得共、往還寺者弟要傳二相譲為致相統申_ハ。然二右圓心実子新發意者人御座_ハ得共、若年二而病死仕其外実子無御座、終二宝永二年二月廿二日病死仕、則院号智覺院

と 御免被下_ハ。依之南溟寺無住二罷成申二付、功德聚院様より御堂衆噫慶を被為 召出、於能州南溟寺筋目之者者無之哉と被為遊 御尋_ハ得共、筋目之者は老人も無御座_ハ旨噫慶申上_ハ由及承候。依之河州出口光善寺殿御舍弟_{法名真願院}_{号智乘院}南溟寺住職被為 仰付候。然者拙僧儀南溟寺筋目之者二御座_ハ得者無住二罷成_ハ節泉州へ罷越寺相統も被可仕者二御座_ハ得共、其折幼少二而殊二国を隔罷在_ハ故其儀も無御座空所縁も切申_ハ。右之外樹心一生之間 兩御門跡様被為加 御哀憐_ハ趣共者署之申_ハ。隨 御尋二且々可申上者也。依而由緒如件。

能登国珠州郡鵜飼

延享二乙丑年五月

往還寺 智 春

文献

○日野 環「学寮開基法海院樹心伝及其資料(一)」昭17 『大谷

学報』第23巻第1号・第3号

氏は学寮創立を延宝六年御長屋創建の時とし、学寮開基を樹心とされる。なお恵琳文書の「禪宗ノ清規ヲ模シテ別ニ準則ヲタツ」から、かの三ヶ条の「御壁書―講筵規則」は樹心の作と推量されている。

○南溟寺編『南溟寺四五〇年史』昭61

28 『学寮創建の財的支援者高木宗賢について』 日野 環

昭24 『大谷学報』第29巻第1号

29 『惠空老師行状記』 惠暁撰述 享保七

写本金森善立寺所藏

抜粹

同五年（宝永）ノ頃、浪華ノ住人高木氏後剃髮シテ親厚無ニシテ宗賢ト號ス本院ニ訴へ、空（惠空）ヲシテ天満本泉蘭若ニ講ゼシメンコトヲ請フ。遂ニ果シテ其期ヲ得タリ。高木氏喜ビ斜ナラズ。仍テ寶永六巳年夏四月中旬ノ五、彼ノ蘭若ニ於テ選擇集ヲ開筵ス。其ヨリ後寅（七年）ト辛卯（正徳元）ト癸巳（三年）ト午甲（四年）ト未乙（五年）トノ歳、同處ニ於テ次ノ如ク大經ト觀小兩經ト三帖和讃ト導師ノ具疏ト玄序分義トヲ以テ講演ス。凡ソ筵ヲ儲クル毎ニ列衆ノ僧千二百ニ足ラントス、其餘ノ近男近女ハ數ヲ知ル能ハズ。……抑モ高木氏ハ親子共ニ身ハ世塵ニアリト雖モ、數歳ノ講筵ヲ本泉蘭若ニ建ツル事タルヤ、殊ニ以テ首尾成就スルコト今ヨリ之ヲ視レバ法興最モ高シ、因縁以テ比類スベキモノ無キカ。……（原漢文）

（参考文献「光遠院惠空講師略年譜」 経隆 優 昭和59

真宗総合研究所『研究所紀要』第2号）

30 経蔵寄付

（上檀間日記―本山上檀古記録抜萃）

宝暦九年八月廿一日

一、学寮経蔵出来ニ付、詰所々見分之事

全 年八月廿二日

一、学寮経蔵大坂平野屋々寄付ニ付、披露状之事

31 高倉学寮新築 記録 （上檀間日記―本山上檀古記録抜萃）

学寮講堂棟札如左

宝暦五乙亥年正月十五日

普請奉行 講中肝煎

富井采女清房 大坂大黒屋道誓

粟津左京清廉 同京尾張屋勘兵衛

棟梁 宮川市右衛門信泰 肝煎 中谷忠兵衛宗春

宮川長兵衛宗祐

宝暦五年四月十九日

一、御普請方富井采女・粟津左京呼出、今般学寮御普請ニ付始終精勤之段神妙之至ひ、依之拝領物被仰付候旨、於上檀之間月番申渡
一、大黒屋道誓・尾張屋勘兵衛学寮御普請肝煎ニ付、於松之間御料理被下置、御納戸方何モ罷出挨拶ひ

32 龍谷大学では学林創立を寛永十六年（一六三九）とするが、そ

れには学寮創立慶讃会に列した西光寺祐俊の著『学寮造立事』（寛文三年一六六三）が学寮図面も添えて克明に創立の事情を記録しており、つづいて光隆寺知空『学林之由来』（正徳四年）や『学饗万檢雜牘』（延享四年以降学林知事日記）など詳細な記録がある。（『龍谷大学三百五十年史』 史料編）